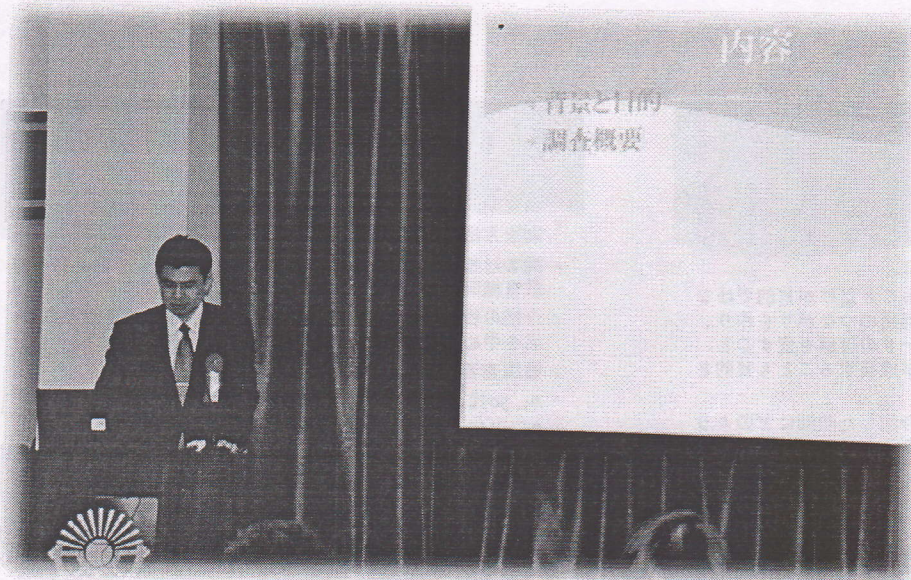


発表：プロジェクトに参加することがどのように教師を成長させるか
片桐準二（モンゴル・日本人材開発センター）



ぜーんぜん変わりました、はい、ぜーんぜん変わりました

なんでこんなモデル会話読んでるんだろーとか思わなくて今いいんですよ

プロジェクトに参加することで授業が大きく変わり、楽しくなる

他の教師との相互作用が起こり、それが教師の成長につながる

2015年日本語教育シンポジウム
3月14日(土) @モンゴル・日本人材開発センター

プロジェクトに参加することが
どのように教師を成長させるか
～インタビュー調査の途中経過から～

片桐準二
モンゴル・日本人材開発センター

内容

- * 背景と目的
- * 調査概要
- * 分析方法
- * 結果：概念
- * 結果図
- * 考察
- * まとめと課題

背景と目的

- * 2014年度のモンゴル日本語教育スタンダード教科書開発プロジェクトは、2013年度のスタンダード教材開発プロジェクトからの続きで実施された。
- * このプロジェクトは教科書を作ることだけが目的ではなく、プロジェクトに参加する教師間のつながりを作り、学び合うことで新しいスタンダードの理解を促すこと、またその過程でそれぞれの教師が成長することも目的としている。
- * そこで、実際にプロジェクトに参加した教師にどのような成長がみられるのかを調査することにした。

調査概要

- 調査期間：2014年2月～5月の予定
- * 調査方法：半構造化インタビュー（一人ずつ日本語で）
- * 調査対象：教科書開発プロジェクトに参加している初中等教育機関の教師10数名（モンゴル人と日本人）
- * 今回の報告ではこのうちの日本人3名（さらにそのうちの1名を中心に分析）
- * 被調査者：年齢、教師経験、インタビュー時間
- * A：30代、5年半、約60分
- * B：40代、5年半、約50分
- * C：60代、20年、約50分

インタビューの質問と分析方法

<インタビューの質問>

- ①プロジェクトに参加したきっかけ
- ②プロジェクトの中での自分がした活動とその感想
- ③プロジェクトに参加した自分自身に起きた変化

<分析方法>

- * 木下(2003)で提唱された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) という質的データの分析方法である。
- * 社会的相互作用による意識や認識の変化など「プロセス的性格」を持つ現象の分析に適しているとされている。

分析手順

- ①インタビューを文字化してデータとする。
- * ②データを読み込み、そこから発言内容のコーディングを行って概念（発言内容が意味することを短い言葉でまとめたもの）を作る。
- * ③解釈が恣意的にならないように個々の概念の発言例について類似例・対極例を集めて確認と比較をしながら概念の精緻化する。（今、作業中）
- * ④概念のまとまりのカテゴリーを作り、概念間・カテゴリー間の関係について繰り返し具体例を参照しながら、仮説としての繋がりを考察し、仮説モデルとしての結果図を作成する。
- * ⑤結果図からそこで見られたプロセスを説明する。

結果 概念① 「表面的理解」

- **定義:** 新しいスタンダードについて、はじめは「表面的理解」であること
- **発言例:** (I:その夏の教材作成の前までは、ま、シンポジウムでちょっと聞いていた、去年のシンポジウムなんかも発表がありましたね、スタンダードで) A:はい (I:その時に理解していたものというか、あまり理解はしていなかったのか、あまり、興味がなかったというか) A:なんか実感湧いてなかった、はい、さーと説明されて何となくふーんと思うんですけど実感は湧かないんですね
- (はじめは)教科書のコンセプトもそんなに理解できなかった
- (I:最初の頃はあまり分からなかったということですか) B:なんか、その一木の何とか、何と言うのかな、そういう表面的なことでは知らなかった

結果 概念② 「他者との相互作用による導き」

- **定義:** プロジェクトの他のメンバーなどと話したことが、スタンダード理解や教科書作成のヒントとなること
- **発言例:** 私も夏の時に、そんなにその絵の大切さはあんまり実は分かってなくて、だから最初のデザインも絵すごく半分ぐらいにしてたんですけど、Tさんに絵ももっと大きくした方がいいよって言われたんですよね、で、ふーんと思って、で、そうなんだと思って、その秋にも、S先生にもこうあそこで考えるのが大事よと言われて、ふーんそうかと、何回かそうやって人に言われて、あーその、最初に、その考えるっていうことが今までと違うんだーと
- どういうふうに出していいか分からないというよりも、出さなきゃいけないということ自体分からなかったんですけど、Rさんに、なんか、彼女忘れたかもしれないですけど、なんかポツとアイデアもらったんですね、それで、あ、そうかっていうちょっとひらめきみたいなのがあって

結果 概念③ 「スタンダードについての理解深化」

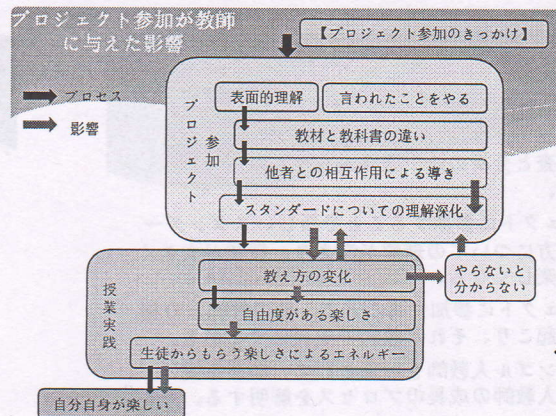
- **定義:** スタンダードの考え方について、表面的な理解ではなくより深く理解できるようになったこと
- **発言例:** 教科書のコンセプトもそんなに理解できなかったと思うんですけど、夏、それで、考えた時間があつたので、秋以降、去年の秋以降、だいぶ考え方本当に変わったなあと思います
- そのスタンダードの理念と違うからここはこういうふうに直した方がいいよみたいなことを念頭に置くので、そういう修正とかも通して (I:修正の時が一番じゃー、このスタンダード理解の深まりに対して) B:そうですね、自分で作るよりも、その違った方向に進んでいる人をどう分かっってもらって、自分が書いちゃうんじゃないかって気付かせる

結果 概念④ 「教え方の変化」

- **定義:** スタンダード教科書作成に参加することによって、自分が教える授業でも変化を起したこと
- **発言例:** (I:前に教えてた時と、スタンダード初中等で始めたあとで、また大学生も少し社会人も教えるという時に、なんか前と違うふう) A:ゼーゼン変わりました、はい、ゼーゼン変わりました
- 教え込まなくて、いいんだなあというの、教え込むというのが、そんなにいいことじゃないんだなあというのが、ほんとに身をもって、今分かっているような気持ちですね (中略) 前みたいな文法積み上げですと、文型教えて、代入練習かなんかして、で、このモデル会話読んでOK、じゃ問題解いて、じゃ次の課と行きますから
- なんでこんなモデル会話読んでるんだらうかと思わなくて今いいんですよ、昔はミラーさんがどうこうしたとか、そういうモデル会話を読んで、会話練習と言っても言葉を入れ替えていくだけの会話練習とかで、これがこの人たち、今のモンゴルで生活しているこの人たちに何の役に立つかなと思ったりもしてたんですね

結果 概念⑤ 「自由度がある楽しさ」

- **定義:** スタンダード教科書では授業内の活動で自由度があるので、それが授業の楽しさを生んでいるということ
- **発言例:** スタンダード教科書で言えば振り返り、で、一般的に言えば最後のまとめの活動みたいになると思うんですけど、それは、やっぱり一番自由度があるので、一番面白そう (中略) 勉強してきたことのまとめとして、なんか活動しようと思った時に (中略) その時間が、それが学習者たちもすごい楽しそうだし、私もその授業やる時間に当たったら、なんか一番楽しいですね
- アンケートとかをクラス全員に取ってきて、で、自分たちでグループで表をまとめると、その表をまとめたり、書いてたりするのは、こう完全に日本語の活動じゃなくて、色を塗るとかの活動も出てきますけど、そういうのを楽しそうにやってくれるから、なんか、そういう日本語だけに偏らなくとも、子供が好きそうなることを選んで組み合わせさせてやっていけばいいのかなと思うので、ああいうなんか活動とかを楽しそうにやってくれているのを見ると (後略)



考察① 結果図から

- * 結果図から分かることとして次の点が挙げられる。
- * 1)プロジェクトに参加している他者との相互作用が起きる。
- * 2)プロジェクトに参加したことで、新しいスタンダードについての理解が深まる。
- * 3)自分が教えている授業が大きく変わる。
- * 4)以前よりも楽しく教育活動ができるようになった。

考察② スタンダード理解

- * 新しいスタンダードの考え方については、表面的理解⇒プロジェクト参加⇒教科書作成⇒授業実践といったステップを踏むことで少しずつ理解が進むものである。
- * どうして新しいスタンダードの考え方はすぐに理解できないのか。Cf.「ぜんぜん変わりました、はい、ぜんぜん変わりました」とあるように言語教育におけるパラダイムが変わっているという背景がある。

考察③ 言語教育のパラダイム転換

パラダイム	第1	第2	第3
年代	1960年代以前	1970年代～	2000年代～
言語観	文型・構造物	コミュニケーション	コミュニケーション
教師役割	教える	教える	支える
学習者の立場	受身	受身	自律・協働

参考: 佐々木(2006)、西口(1991)

考察④ プロジェクト参加と教師の成長

- * 協働で「教材開発を行うことで、教師間に多様な対話生まれ、対話によって教師に大きな学びが生まれ、それが教師の成長につながる」とい指摘がある(嶋田2011)。
- * 今回の調査でも「他者との相互作用による導き」といった概念が出てきたように、プロジェクト参加は他者との相互作用を生み、それがスタンダード理解の深化へとつながっており、そこに教師の成長が見られた。

まとめと課題

- プロジェクトに参加した教師を対象としたインタビュー調査と分析の途中経過から以下2点が分かった。
- * 1)プロジェクトに参加することで新しいスタンダードの考え方についての理解が深まり、授業が大きく変わり、楽しくなる。
 - * 2)プロジェクトに参加することで、他の教師との相互作用が起こり、それが教師の成長につながる。
 - * 今後はモンゴル人教師を対象として、調査を続けて、モンゴル人教師の成長のプロセスを解明する。

参考文献

- 木下康仁(2003)「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い」弘文堂
- 佐々木倫子(2006)「パラダイムシフト再考」『日本語教育の新たな文脈』p.259-283、アルク
- 嶋田和子(2011)「教師の成長を促す教材開発の意義—「できる」を重視した初級教科書開発を通して—」『日本語教育学会春季大会予稿集2011年5月21日-22日』p25-28
- 西口光一(1991)「コミュニケーション・アプローチ再考: 伝統的なアプローチとの融合を目指して」『日本語教育』75号、164-175